

古書のたのしみ（令和四年四月）

土屋 博

一「國文評釋 第一編より第五編まで 全五冊」第一高等中學校教授落合直文著
（博文館藏版、明治廿五年より廿六年にかけて刊、五冊金五拾五錢、一〇六頁＋一〇三頁
＋

全五冊古書價格三千八百圓也。三月の「神田古本まつり」にて端本二冊（第一編及び第四編）のみを購入せしところ、今般五冊揃ひのものを幸運にも入手することを得。

落合直文は一八六一年気仙沼生れの歌人・國文學者。東京大學文科大學古典講習科一期生。孝女白菊の歌は名高し。一九〇三年肺疾患のため歿。

國文を學ぶ者にとりて、國文の典型例を蒐集せる極めて貴重なるテキストなり。文章の取捨選択には、当時の価値観大いに反映す。國文として採択されたるそれぞれの文章の上部には落合氏の評釋、更に文章の終りには總評も附せらる。

源平盛衰記の箇所は以下の如し、「死生の際に臨みて、惑はず、懼れず、猶且つその名を風流の上に留めむと欲す。その心の、至誠に出づるにあらずば、いかでか能くこゝにいたらむ。千載の今日、こを吟誦するたびに、なほ生ける忠度を見る心地せらるゝなど、いとあやしうてなむ」と。

ちなみに、第二編の目次は加藤千蔭「山里の月を見る記」、中島廣足「道のへに鶉をきく」より、平田篤胤「経緯儀序」、村田春海「祭芳宜園大人詞」まで。第三編の目次は、紀貫之「古今和歌集序」、城戸千楯「松屋文集序」より、源平盛衰記「忠度の風流」、太平記「大内裏」まで。第五編の目次は、謡曲「鉢木」、「菅原傳授手習鑑」より寺子屋段、瀧澤馬琴「芳流閣」の三作品なり。



寺、乃木と東郷、など。「乃木、東郷の二大將は現代陸海軍の花として一世の人氣を集注す。加藤清正、西郷隆盛が錦繪の題目たる時代は過ぎ去りて、現今の児童は口を開けば則ち東郷、乃木を稱す」と。



四「大西郷」黒頭巾著

(弘道館、大正四年刊、正價金壹圓五拾錢、四八二頁)

古書價格千五百圓也。これも黒頭巾、横山健堂の著作なり。題辭に曰く、「意氣無き人は振はず、意氣の無き民族は榮えず。此の意味に於て大西郷の意氣は我が民族の意氣を象徴す」、また曰く、「我が近世に於て百世の寶とす可きものは近松の文章、大西郷の人物なり」と。目次は、序説、奈良の大佛前にて大西郷を憶ふ、大西郷の風貌、態度、大西郷の青年時代、大西郷に對する人物論、藤田東湖と大西郷、大西郷と勝海舟、大西郷と明治の陸海軍、島の大西郷、井伊大老と大西郷、月照と大西郷、復活の大西郷、熊本城下に於ける大西郷、大西郷及び其部下。

たとへば、「大西郷と勝海舟」の箇所を繙くに、「大西郷と勝海舟とは一時の敵手にして永遠の心友たり。海舟の大西郷觀は『夫れ達人は大觀す』の一句に盡く」と。大西郷の研究家には必須の一冊と覺ゆ。

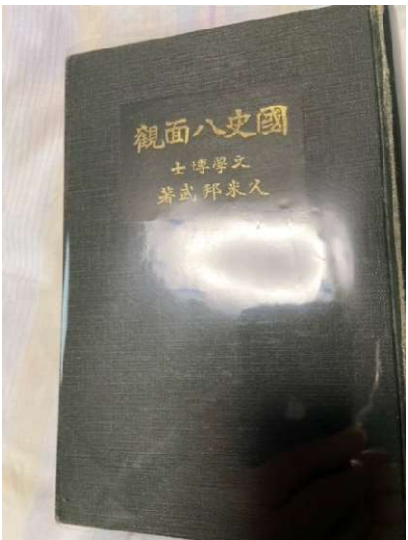




五「國史八面觀」久米邦武著

（磯部甲陽堂、大正四年刊、正價金壹圓貳拾錢、四八二頁）

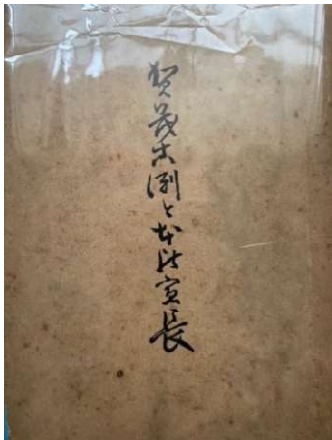
古書價格二百圓也。歴史學者久米邦武は一八三九年佐賀城下の生れ、一九三一年歿。岩倉使節團に同行し「米欧回覽實記」を著はし、帝國大學教授兼編年史編纂委員となるも筆禍事件により辞任、以後立教學校、東京專門學校にて教鞭をとる。序文に曰く、「國史八面觀とは何ぞ、國史は正面の京都より見下して書かれたれど背面の地方よりも見上げて考へざるべからず、表面は男子の行動を主として記すれども裏面に女子の干係なくんばあらず、外面に現はれたる軍談戰記は勇ましけれど内面に伏する領地兵糧のうるさき争ひあり、前面は法制儀式に精神を耗すれば後面に音楽歌舞の興味を惹く、假に是を八面觀とは名付けたりと。目次は、遷都雜説、古代の門閥家より、藤原不比等と橘三千代まで。



六「賀茂真淵と本居宣長」文學博士佐佐木信綱著

（廣文堂書店、大正六年刊、本文二二六頁）

古書價格二百圓也。佐佐木信綱は一八七二年三重に歌人弘綱の長男として生れ、東京帝大文學部古典講習科に進み、一九六三年歿。昭和十二年には文化勲章受章。信綱、序文に曰く、「幼時父より古歌の暗誦を授かりつる時、『うらうらと長閑けき春の心より』（眞淵）、『さし出づるこの日の本の光より』（宣長）の二首は最もはやく教へられしものなり」と。

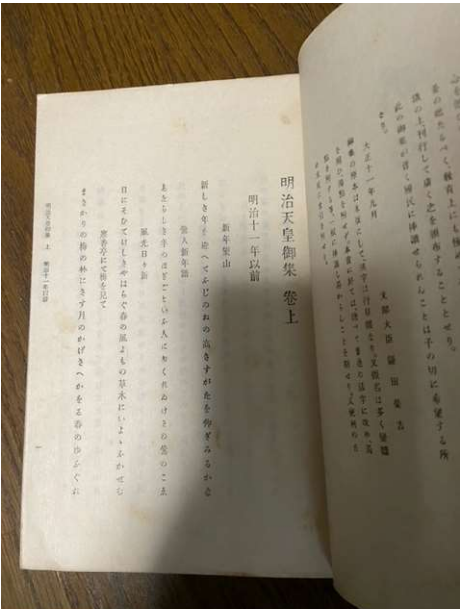
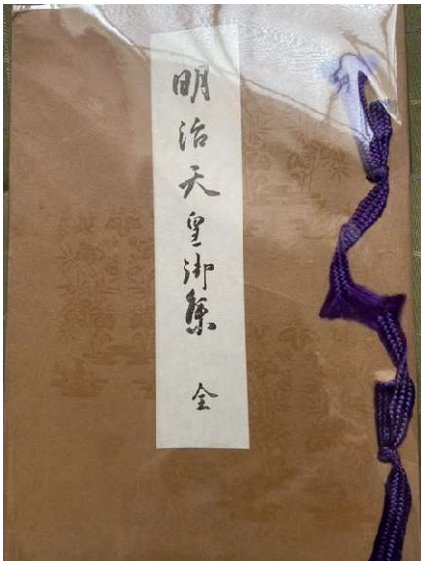


七「明治天皇御集 全」

（宮内省蔵版、文部省發行、印刷局印刷、大正十一年刊、定價金壹圓五拾錢、本文二九〇頁）

古書價格三百圓也。和綴、豪華版にして、状態も頗る良し。これまで御集に関する著作數多蒐集しつれど、本書こそは一家に一冊備ふべき基本的書籍なり。

文部大臣鎌田榮吉、序文に曰く、「今回宮内省に於て明治天皇御集の編纂成り、思召を以て夫々へ下賜せられたり。此の御集は、明治天皇の御盛徳を仰ぎ、御仁慈の大御心を偲び奉るに最も適當なるのみならず、又實に國民にとりて修養の鑑たるべく、教育上にも極めて有益なるを以て、宮内大臣と協議の上、刊行して廣く之を頒布することとせり。」と。



八「師範漢文 卷一より巻五まで」簡野道明編

（明治書院、昭和元年より七年にかけて刊行、定價各五拾錢、本文一二八十一五三十一三八十一三六十一三四頁）

全五冊古書價格二千圓也。簡野道明は一八六五年伊予藩士の子として江戸八丁堀に生まれ、愛媛師範、東京高等師範卒。南予にて教鞭をとりたるのち上京し師範學校教諭、東京女子高等師範教授となる。一九三八年歿。

卷一は句例一「花開。鳥啼。花開鳥啼。」に始まる。卷三までは、皇朝史略、國史略、近古史談、先哲叢談、日本外史など飽くまでも日本漢文主体の構成なり。卷四以降には漢土の収録作品も多少増え、卷四には諸葛孔明「前出師表」、韓愈、柳宗元の作品なども散見せらる。卷五には蘇軾「前後赤壁賦」、文天祥「正氣歌」、陶潜「歸去來辭」なども見ゆれど、一方、徳川齊昭「弘道館記」、藤田東湖「和文天祥正氣歌」も目を惹く。（今日の漢文教育に於て日本漢文何処まで教へられたるや、不安無しとせず。）



九「百人一首講義」文學博士佐佐木信綱著

（博文館藏版、昭和四年四十版、正價金六拾五錢、二九七頁）

古書價格百五拾圓也。初版は明治廿七年。緒言より、「いにしへより、勅撰私撰の歌集百首歌合等、その数いと多かれど、薪こる山賤、藻鹽くむ海土の一文字だに知らぬ者も、其名を知れるは、この百人一首なりけり」と。



十「作文参考書」

(陸軍予科士官學校、昭和十三年、一一二六頁)

古書價格三千圓也。二度目の購入なれど、今回のものは表装製本の仕上がり良く、未永く保存するに足る。申すまでもなく、文語を學ぶ者にとりてはバイブルとすべき一冊なり。冒頭頁には、「本書を以て作文の参考に供すべし」との陸軍豫科士官學校長甘粕重太郎の第三三八號指令掲げらる。

目次を見るに以下の如し。第一編総論(文の三要素すなはち明晰雄健優麗、想について、辭について、文體、文の種類)、第二編普通文に関する文話及び文例、(記事文、叙事文附日記紀行、解説文、評論文、感想・式辭・勧誘等の文)、第三編書牘文に関する文話及び文例(書牘文の形式作法、書牘文の変遷)。

(令和四年五月十四日受附)

